

◎ COC+ 関連事業 宇治市ものづくり企業セミナー

地元企業と学生が本音で話し合うセミナーを開催しました

「宇治市ものづくり企業セミナー」を宇治市と本学が共同で開催し、地元宇治のメーカーから7社、本学からは学生17名が参加しました。当日は3部構成で、角井食品(株)代表取締役 角井美穂様から「地域に根差した企業経営とは」と題してのご講演、そして企業の方々による「メーカーで働く楽しさ、きっかけ」をテーマにしたパネルディスカッション、最後は参加者全員が5グループに分かれてのディスカッションと盛りだくさんの内容に取組みました。

地元宇治で企業と学生が本音で話し合う機会は、お互いが理解し合える貴重な時間で、学生にとっては、就職で地元を選択肢として考える契機となっています。

ご参加いただいた企業からは、「学生さん1人1人が自分の考えや思いをしっかり持ち、話をしてくれましたので、印象が変わりました」「前向きに取り組んでいる大学生をみて将来がんばってくれそうな期待をもたせてくれました」、また、学生からは、「実際に興味をもった企業さんもあり、もっと個々の会社の事業内容など聞きたかったです!!」「地元で働く魅力をたくさん聞かせていただいて、地元で働く魅力を感じた」と、前向きな印象や意見が寄せられました。



お知らせ

平成26年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)

地域のみなさんから、地域を志向した「共同研究」を公募します!

本事業は、自治体職員、団体・企業、地域住民と本学教員による「住民参画型」ならびに「産官学協働型」の共同研究を公募します。地域福祉・保育(家庭児童福祉・保育)・学校教育(小中高大連携・郷土教育・観光学習)・メンタルヘルス(復職支援・自殺予防)、観光、商店街、まちづくり、中小企業研究・地場産業、都市経営等のテーマにおいて、地域課題解決に取り組む共同研究を支援します。

● 申請期間: 2017年2月10日(金)~2017年3月10日(金)

● 募集対象:

(1)「住民参画型」共同研究…(Ⅰ)30万円(上限/1年間)【3件募集】、(Ⅱ)50万円(上限/1年間)【1件募集】

地域住民とともに地域ニーズを汲み取り、地域住民が主体となり地域志向研究に継続的に取り組める仕組みづくりを推進し、地域課題に取り組む研究に対し、経費補助を行います。

(2)「産官学協働型」共同研究…(Ⅰ)30万円(上限/1年間)【3件募集】、(Ⅱ)50万円(上限/1年間)【1件募集】

本学・企業・行政が連携し、各々の領域において単独で解決が困難である地域課題に対し、それぞれのリソースを持ち合わせることで新たな解決方法を模索する研究に対し、経費補助をいたします。

※書類を提出する前に、必ず事前に京都文教大学フィールドリサーチオフィスへご相談ください。
※申請書類提出後、本学教員とのマッチングを行います(内容によっては、マッチング不可の場合や申請書類が受理されない場合もあります。ご了承ください)。
※申請状況等により、上記の上限金額、採択件数は変更となる場合があります。

こんな方はぜひ、
お問合せください!

- 地域活動に取り組む中で、課題を抱えており、解決方法を模索している方
- 地域活動に取り組む中で、地域課題や地域ニーズの把握、課題分析等の調査や研究に取り組みたいが、方法がわからない方
- 本学のリソースを活用し、本学教員と協働して地域課題や研究に取り組みたい方

● お問合せ・提出先: 京都文教大学フィールドリサーチオフィス

京都文教大学人間学研究所
京都文教大学地域協働研究教育センター 共催
公開シンポジウム

アニメ聖地巡礼の意味を考える
~「響け!ユーフォニアム」への人間学的アプローチ~

● 日時: 2017年2月12日(日) 11:00~12:30

● 会場: 京都文教大学 14号館14101教室

● お問合せ: 京都文教大学人間学研究所
TEL:0774-25-2494 / e-mail:human@po.kbu.ac.jp

地域連携学生プロジェクト2016
成果報告会

● 日時: 2017年3月2日(木) 10:00~12:30

● 会場: 京都文教大学 弘誓館G104教室

● お問合せ: 京都文教大学フィールドリサーチオフィス

地域に根ざし、地域に学び、地域の課題解決を目指す学生たちの自主的な取組を募集し、支援しています。今年度採択された「宇治☆茶レンジャー」「商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas」「響け!元気に応援プロジェクト」「子どもの農業体験応援団」の4団体が活動の成果と課題を報告します。

京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニュースレター **ともいき** vol.9
2017年2月発行

「京都府南部地域 ともいき(共生)キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えます。



文部科学省「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」へ参画

平成27年度より始まったCOC+事業は、大学が地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先の創出をするともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラム改革に取り組む大学を支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的としています。本学は、平成28年度より、「北京都を中心とする国公私・高専連携による京都創生人材育成事業」(※)へ参画しています。

(※)「北京都を中心とする国公私・高専連携による京都創生人材育成事業」

幹事校：京都工芸繊維大学

参加校：舞鶴工業高等専門学校、京都府立大学、京都学園大学、京都文教大学、(京都大学 COC既採択校として参加)

参加自治体：京都府

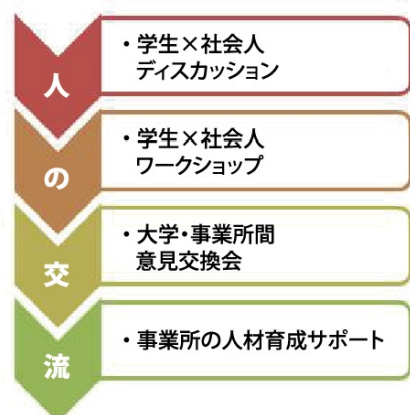
事業協働機関：京都工業会、丹後機械工業協同組合、福知山商工会議所、舞鶴商工会議所、NPO法人 グローカル人材開発センター 他

京都文教大学COC+事業では・・・

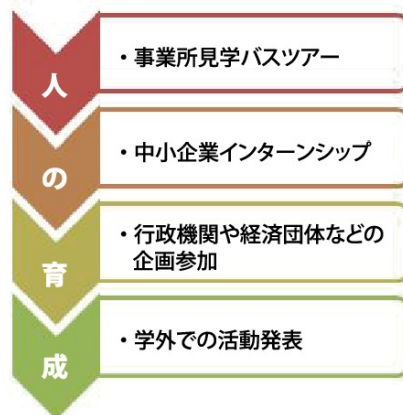
地域と一体となって人材の育成が行われるCOC事業<地(知)の拠点>をベースとし、そこで育った学生が地域や地元へ魅力を感じ、学生にとって魅力ある就職先の創出と定着を目指しています。

【COC】 地域志向の学び ともいき人材の育成

<学生と事業所・社会人との交流>
<大学と事業所との交流>



<大学生の学外体験>



<大学をハブとする地域・社会循環>



【COC+】 社会との接続 魅力ある地域・職場への定着



ディスカッション & ワークショップ

学生と社会人が一緒になって同じテーマに取り組めます。学びを共有することで、双方で人が育つ環境を整えていきます。



地域の事業所との意見交換会

人と地域、事業所が育つために必要なことをディスカッションしながら意見交換します。出てきた課題や意見については、今後の取組の中で活かしていきます。

地域の事業所の人材育成サポート

地域人材の育ちあいを進める過程において、社会人として学生と共に活動することは、手本となることが求められます。職場とは違ったところで、主体的に取り組むことが価値観を深め、更に考えて行動できる人材への成長を促します。



事業所見学バスツアー



2016年8月には、京都中小企業家同友会の協力を得て3社を見学し、2017年2月には、地域インターンシップ入門 業界研究バスツアーとして「宇治市役所編」「小売・サービス編」「保育編」の3つのツアーを予定しています。今後も引き続き行います。

中小企業インターンシップの活性化

今までに実施しているインターンシップに加え、更に地域と共に育つ企業と連携を深め、参加学生と企業双方の育ちあいを構築しています。

学外での発表活動

学生が行う活動を学外発表することで、社会から評価を受け、取組を改善し、PDCAサイクルを回すことで、次の活動に向けた起点となっています。

行政機関や経済団体の企画に参加

2016年11月の京都中小企業家同友会伏見支部例会に学生が参加し、パネルディスカッション、グループ討論が行われました。グループ討論では、「働くとは」というテーマをもとに活発な意見交換が行われ、学生と社会人がお互いを知るきっかけになりました。



地域人材育成・小中高大連携

「プロジェクト科目(地域)」や「地域ボランティア演習」、「ともいき(共生)フェスティバル」など、正課内外の取組を通じて、地元の小・中・高と連携し、地域人材育成と定着を図っています。



事業所の採用枠創出

事業所と交流する中で、採用ニーズ、情報を集約し、事業所の発展にもなった採用枠が生まれる土壌づくりも目指します。また、採用活動されている事業所の意見を伺い、学生の地元就職へ役立てます。

事業所(企業)説明会

宇治市と連携し、2017年3月に行われる宇治市合同企業説明会までに学生と企業の接点を増やしながらか、お互いに理解しあえる説明会づくりを行っています。

※1月18日に開催した「宇治市ものづくり企業セミナー」の報告をP.7に掲載しています。



<京都府南部地域における体制づくり>



ともいきキャンパス

京都府南部地域の行政、団体、企業などと連絡しながら、学生、教職員、地域住民が共に学びあう「ともいき(共生)キャンパス」づくりを行います。また、建学の理念「ともいき」に共感する地域や人、事業所、各種組織団体などが集まる「京都文教ともいきパートナーズ」を創出し、本学の学生や卒業生が地域で活躍、定着していける体制を整えていきます。

京都文教大学創立20周年記念事業

ともいき(共生)フェスティバル2016 開催

2016年12月10日(土)に実施しました。

本学創立20周年記念事業として開催した、今年の「ともいき(共生)フェスティバル2016」は、お天気にも恵まれ、約2,000名もの方にご来場いただき、大盛況となりました。当日は、「ともいき」の名の如く、お子さんから高齢者、障がい当事者や企業人など地域で暮らす様々な人たちが集まり、活動発表や講座、体験ブースやトークセッション、手作り品の模擬店などを楽しみました。当日の様子を写真を中心に紹介します。

「大学れもんカフェ」には、学生や高齢者など大勢が集いました



宇治市認知症アクションアライアンスに関する当事者研究
-「認知症の人にやさしいまち・うじ」の実現に向けて-
ともいき講座「認知症とともに生きる」
「大学れもんカフェ」を開催

研究代表者：平尾 和之(臨床心理学部臨床心理学科 准教授)

「認知症の人にやさしいまち・うじ」の実現に向けて、ともいき講座「認知症とともに生きる」、大学れもんカフェ(認知症対応型カフェ)を開催しました。

ともいき講座では、認知症当事者である伊藤ご夫妻と同志の森先生が、認知症とともに生きる旅の歴史を語られました。個として認知症に向き合う不安や困惑の日々から、仲間や支援者と出会い、地域の中でともに生きる希望を見出していく伊藤ご夫妻の物語は、参加された160名ほどの方々の心を捉え、それぞれのアク

ションを喚起するものとなりました。

講座後には多くの方がカフェのほうにもお越しになり、認知症のある人もない人も一緒に交流しました。このように安心してやりとりができるような場が、宇治市の中に少しずつ広がり、そしてその垣根がなくなっていけば、「認知症にやさしいまち」が実現するのではないか、という可能性を感じました。

みなさんの笑顔とともに、心に残る特別な一日になりました。



宇治の魅力発信のために立ち上がった市内の高校生たちによる、高校生プラットフォーム「めっ茶、好きやねん!!〜宇治に届け〜プロジェクト」が、現代ファッションと和装を合わせた服を作り、「UJI collection」と題したファッションショーを行いました。ショーの構成やモデルも高校生が務め、和装の新しい展開を発表しました。



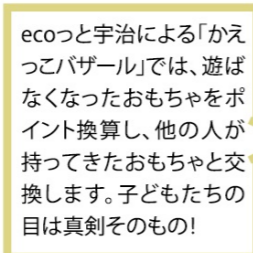
オープニングを飾ったのは「ふるさと宇治検定クイズ大会」。宇治市内の子どもたちから募集した宇治にまつわる問題を二択で出題。ゆるキャラも加わって盛り上がりました!



全国大会で優秀な成績を残す本学軟式野球部が、昨年に引き続き、小学生を対象に野球の楽しさを伝える教室を開催しました。初心者から地域の少年野球団に所属している子まで、約60名以上参加し、経験・ポジション別に分かれて練習を行いました。グラウンドには始終楽しそうな声が響いていました。



(株)典座と京都文教短期大学食物栄養学科による特別メニュー「ともいきヘルシーランチ」。学生が身体にやさしいランチを考案し、(株)典座が商品化しました。



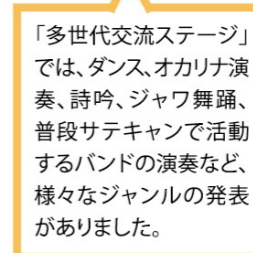
ecoつと宇治による「かえっこバザール」では、遊ばなくなったおもちゃをポイント換算し、他の人が持ってきたおもちゃと交換します。子どもたちの目は真剣そのもの!



本学臨床心理学部教育福祉心理学の教員や小学校教員を目指す学生たちによる「小学生わくわく体験」は今年も大盛況。「手作り工作遊び」「おもしろさんすうワールド」「わくわく科学たいけん」「ことば遊び・かるた」「わくわくキャンパスツアー」の5つのコーナーを展開しました。子どもだけでなく大人も一緒になって楽しく体験しながら学んでいました。



KBS京都報道キャスターの竹内弘一氏をお招きし、地域と企業をテーマにトークセッションを行いました。(詳細はP. 5)



「多世代交流ステージ」では、ダンス、オカリナ演奏、詩吟、ジャワ舞踊、普段サテキャンで活動するバンドの演奏など、様々なジャンルの発表がありました。

京都府からの委託事業「宇治茶文化講座2016」の第3・4回を開催。本学の非常勤講師 島津良子氏と日本茶インストラクターの林屋和男氏を迎え、各回50名以上が参加されました。



京都文教短期大学幼児教育学科の岩佐ゼミ生による打楽器演奏。最後には「津軽海峡冬景色」の熱唱もあり、会場を盛り上げました。



メイン会場のサロン・ド・パドマには、可愛い雑貨や美味しいお菓子など、地域の方による手作り品を販売するブースがたくさん出店されました。

「子ども記者」による取材も行われました。各ブースのスタッフや学生に話を聞き、自らも体験し、一番印象に残ったことをそれぞれ記事にまとめました。



地域連携学生プロジェクトの紹介ブースでは、活動紹介や活動の一端が体験できるコーナーが並び、学生と地域の方との交流の場となりました。



「ともいき(共生)トーク」を受け、学生、教職員、企業関係者と、学生の地元定着や中小企業との橋渡し等をテーマに「まちづくりミーティング」を行いました。(詳細はP. 6)



北槇島小学校の3・4年生が、総合学習「宇治学」の一環で学んだお手前を披露した「子ども茶席」。「一服いかがですか?」と元気いっぱいに参加者に呼びかけ、お客さんの目の前で子どもたちが丁寧に茶を点てました。お抹茶は、宇治市内産の抹茶を提供いただき、2時間で保護者の方など100名以上の方にお越しいただきました。



COC+事業参画記念講演 ともいき(共生)トーク 開催

2016年12月10日(土)、「ともいき(共生)フェスティバル」内で実施しました。

「ともいき(共生)フェスティバル」において、13:00から「ともいき(共生)トーク」が本学サロン・ド・パドマ内で行われ、「人と地域と企業が育ち合い、共に生き生きするまちへ」をテーマに、就職のミスマッチ解消、若者の地元定着についてトークが展開されました。ゲストにKBS京都 報道部キャスター竹内弘一氏を迎え、本学からは平岡聡学長、森正美教授、黒宮一太准教授、松田美枝講師の4名が登壇しました。

「ともいき(共生)トーク」に先立って行った本学の学生約100名を対象としたアンケートでは、学生は職種、職場の雰囲気重視して就職先を考えていることがわかりました。また、学生から中小企業に対して、「アットホーム」「地域密着型」などポジティブな意見が挙げられている一方、「給料が低そう」「辞めづらそう」などネガティブなイメージや、そもそも「中小企業」に対してイメージのない学生も。それらの結果を受けて、トークセッションを行いました。

このような雰囲気の中でパネルディスカッションができるのは画期的なことですね。

今までに600社ほど取材しており、自らが下調べして、ディレクションして撮影を進め、構成しているので企業の実態はわかっています。就職に関していうと、大企業にとっても中小企業にとっても、学生は金の卵で、我が社に就職してもらいたいと企業は考えています。17、8年前とは世の中の状況が変わってきていて、企業は人材確保に困っているのが現状です。

学生が就職を考えた際、重視するポイントとして、京都文教大学で出ているものは他も同じような傾向にあります。

学生が企業を知ることは大切で、就職を決める過程では、インターンシップだけではなくアルバイトから知ることがあっても良いように思います。そうすれば、お互いにわかったうえで就職ができ、ミスマッチも解消されていくのではないのでしょうか。

KBS京都 報道部キャスター 竹内弘一氏



森正美

総合社会学部教授・地域協働研究教育センター長

地域という場所は、学生が一番いきいきと学べるフィールドだと思っています。竹内さんのように、現場をたくさん回られている方の言葉には実感がある。学生も地域に出て、現場を知り、心に響く体験をして、「ここで働きたい」「こういう風に生きたい」と実感して欲しい。そのような場所を一緒に作っていきたくて考えているので、ぜひ地域の方にはパートナーになっていただいで、一緒に学生を育てていただければと考えています。

黒宮一太 総合社会学部准教授・就職委員長

学生が就活で企業にエントリーする際には、職種が入り口になっている印象があります。興味深いのは、自らの特性や経験から「この職種が合うのではないか」と選んでいる傾向がみられること。また、メディアで紹介されていたり、バイトなどで関わりのある企業しか知らないという学生が多い。今、地域資格制度取得を目指す正課の授業で京都中小企業家同友会さんと連携して授業を行っているので、この授業を通して、学生の企業観や仕事観がどう変化するか、楽しみです。



松田美枝 臨床心理学部講師・地域協働研究教育センター員



臨床心理学の学生は、カウンセラーを志して入学する学生が多く、大学院に進む学生も多いのですが、在学中の活動や卒業論文で自分のテーマが消化されて、一般就職する学生もいます。教育福祉心理学部では、小学校教員、保育士、精神保健福祉士など入学する時点で職種が決まっています。ボランティアやインターンシップ、実習と段階的に現場に馴染むことで、高い合格率も出ています。現場で経験したいという意志をもっていても踏み出せない学生たちを、COC+事業の取組みで現場に出していく仕掛けが必要です。

中小企業のイメージとして挙がっている「〇〇そう」というのはつまり「知らない」ということだと言えます。知らないがばかりに損をしている点が学生にも、企業にもたくさんあると思います。自己と他者を生かす合「ともいき(共生)」という理念は、つまりwin-winの関係のことであると考えています。就活を通じて、企業は自社の強みを知り、学生は自分自身のことを知り、そしてお互いを知ることがミスマッチ解消に繋がり、「ともいき(共生)」の関係になるのではと思います。

平岡聡

京都文教大学 学長

COC+事業参画記念・ともいき(共生)フェスティバル特別企画 「中小企業との出会い編」 まちづくりミーティング 開催

2016年12月10日(土)、「ともいき(共生)フェスティバル」内で実施しました。

同日13:00から実施した「ともいき(共生)トーク」の内容を受け、14:00から実施した「まちづくりミーティング～12/10特別企画・中小企業との出会い編～」では、KBS京都 報道部キャスター 竹内弘一氏をゲストに迎え、企業や行政のみならずと本学学生、教職員とともに「中小企業と学生との出会い、相互理解」について考えました。

導入

学生の就職活動傾向

大手就職サイトを使って就職活動
まず、知っている有名企業、大手企業から受ける…

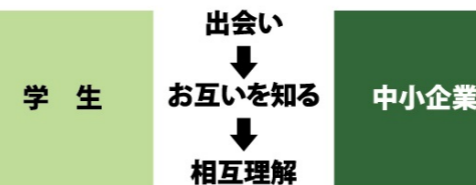
なんとなく
中小企業に
ネガティブなイメージ?

本学学生の実際の就職先

中小企業を選択するケースが多い

*学生は大手就職サイトを使って就職活動をすることもあり、中小企業との出会いが遅れる可能性がある

テーマ



本学学生は就職先として、「中小企業」を選択するケースが多いのであれば、もっと早い段階から「中小企業と出会い、お互いをしっかりと理解しあうこと(=相互理解)が必要では？」という投げかけのもとでディスカッションがスタート



方法

グループディスカッション

*1グループ6名～7名程度(企業、行政、本学学生、本学教職員)
*各グループに学生が2～3名入り、グループディスカッション時のファシリテーター、書記、発表を担当しました

グループ A

学生側の中小企業のイメージは、社員同士の距離が近い、地域密着であること、中小企業の学生のイメージは、何をやるにしろ「大丈夫ですか?」と聞き癖がついているということをメンバーで共有しました。また、中小企業は、即戦力を求めているため、学生は目標、やる気、向上心を持って、成長し続けることが必要だという議論になりました。



グループ B

学生と中小企業にはどんなギャップがあるのかという話から入りました。学生は、待遇や福利厚生を重要視している傾向があるので、大企業に目が行きがちになる。一方、中小企業は「この学生は将来何をしたいのか」「将来何をしてくれるのか」を見ているので、学生のうちに将来をしっかりと考え、将来にやりたいことから企業選択することが大切ではないかという議論になりました。



グループ C

日本の中小企業は99.7%という割合のため、同じく99.7%の子どもは親が中小企業に勤めているという切り口から、親が勤めている中小企業のイメージだけではなく、もっと多くの中小企業の魅力を知ってもらう機会や中小企業側からの発信がもっと必要だという議論になりました。

グループ D

近頃の学生は協力的な学生が多く、まわりと仲良く、うまくやっていきたいと思っている学生が多いです。しかし、そんな学生が本学の建学の精神の「自他共生」を具現化する機会があれば、自他のことをもっと考え、行動できるようになるのでは。そのためには、授業を通じてもっと中小企業と出会う機会を作りたいという議論になりました。

KBS京都 報道部キャスター 竹内弘一氏 からのコメント

もちろん、大企業は福利厚生や給与など魅力的なことはいっぱいあります。しかし、今まで中小企業を取材してきた経験、また私自身も中小企業に勤める身として、中小企業の魅力は働く人が「何をしたいのか?」、「何ができるのか?」を考えて働くことができることにあります。有名企業だから価値があるのではなく、「生まれ育ったところで働き、自身を支えてくれた人々と共に働き、地域のために力になること」、そういうことに価値を求める働き方もあると私は考えています。

